

【様式1】

令和8年度 授業改善推進プラン（全体）

学校名 豊島区立 池袋第三小学校

校長名 塩田 英俊

学校の教育目標		
人間尊重の精神を基調として、心身ともに健康で豊かな人間性と向上心を培い、時代の変化に主体的に向き合い、多様な文化や考えを認め尊重しながら、自ら考え判断し、主体的に行動することができ、よりよい社会の創り手としての資質・能力の基礎をバランスよく身に付けた児童を育成する。 ◎よく考える子 ◎思いやりのある子 ◎じょうぶで元気な子		
学力に関する目指す児童像		
主体的に考えて課題を探究する児童		
授業改善推進プランの全体像		
本校の児童の課題 ○ 知識・技能の定着、思考・判断・表現する力が定着していない傾向が見られる。 ○ 問題解決の場面で自分の考えに根拠をもち、論理的に考えていくことの定着が不十分である。		
自ら課題を見出し 見通しをもつ 前時の学習の振り返り 基礎・基本の定着 教材提示の工夫 振り返りを活用した課題 設定	課題を解決する ・学習プロセスの細分化 （スモールステップを踏 まえた学習展開） 学習方法の選択 ・課題解決に向けた対話 的な活動 ・学習の楽しさを味わう 協働的な活動	学びを振り返る 次の学習につなぐ 学んだことをアウトプッ する表現の工夫 次の学びにつなげる相互 評価・自己評価 教師からの学びの価値づけ 学習内容の定着
◎校内研究 ・体育の授業を通して児童が関わり合い、楽しさや技能の向上を実感 ・他教科にも手立てを生かす ・低・中・高分科会、知的固定学級による年4回の研究授業		
◎言語活動の充実 ・文章を書く活動の確保 ・自分の考えを説明する場面の設定 ・話の聞き方の指導		

【様式2】

令和8年度 授業改善推進プラン（各教科）

I 国語科

目指す児童像を基にした国語科での育成したい資質・能力		
日常生活に必要な国語を適切に使い、相手や目的に合わせて伝え合う力を高める。		
学年	現在の状況	改善のための取組
スタート カリキュラム	・学習に取り組む意欲は高いが、個人差が大きい。持続も難しい。	・日々の授業で、「話の聞き方」や「話し方」等言葉遣いを意識して指導していく。時間を区切って活動に取り組ませる。
低	・長音、拗音、促音や助詞など基本的な文章の書き方には、課題がある。 ・相手意識や、目的意識は個人差が大きい。 ・相手を意識した話し方や聞き方に慣れていない。そのため、言葉の使い方に課題がある。 ・語彙力が乏しい。	・連絡帳、ノート指導など、日々の学習で継続的に指導をしていく。ドリルパークなど、ICTも活用し、知識理解の習熟を図っていく。 ・授業内でのペアワークを多く取り入れ、質問をしたり、聞き手からの反応を受けて答えたりする機会を意識的に設けられるようにする。 ・スピーチ等全体で話す場を設け、相手を意識した話し方、聞き方に慣れる機会を多く設ける。 ・音読や読書を通し、正しい言葉遣いや文章に多く触れさせる。
中	・漢字や語彙の習得が不十分な児童が多い。学力差が大きい。 ・文章を読み理解する力に課題があり、学力差も大きく、論理的に理解していない。 ・自分の意見や考えを文章に表す力はあるが、語彙力や言葉の使い方について課題がある。 ・分量を多く書くことができる児童は増えてきたが、根拠を明確にした文章や相手に伝わるような文章を書くことに課題がある。	・授業の中で、新出漢字だけではなく既習漢字について振り返る時間をとったり、言葉の意味や使い方を確認しながら進めたりする。 ・漢字を熟語や文章と合わせて指導し、語彙を増やせるようにする。 ・物語や説明文の読み取りの際に、順序を表す言葉に着目させ、文章をまとまりで捉えたり、ワークシートを活用しながら、教科書の文章から根拠を見つけて、言葉で説明させたりするようにする。 ・漢字を使うことや文章のつながりに気を付けて文を書くことを意識させる。 ・下学年の学習内容を含め、児童の実態に応じた課題を出すようにする。 ・文章の型を教師が示し、自分の考えの理由を説明するような機会を意図的につくる。また、書いた文章を互いに読み合うことで、自分が書いた文章が相手に伝わるか、確認する機会を設ける。 ・読書の機会を多くする。

高	・平均正答率において、思考・判断・表現は、目標値を5ポイント上回っているが、区の平均より、5年生は4.2ポイント下回り、6年生は1.1ポイント下回っている。 ・必要な情報を読み取り、自分の考えに根拠をもったり話したりする力が付いていない。 ・聞く領域では、話し手の意図を汲んだり、推察しながら聞いたりすることが苦手である。 ・漢字の定着に課題がある。	・読み取った情報を自分の言葉で理解し、ノートやポスターなどに表現させることを継続させる。 ・単元のめあてに対しての自己の振り返りを充実させる。 ・話す・聞くの場面を意図的に設けて、自分の考えを相手に表現させる。 ・校長講話など、日常の聞く活動を通して、話の要点を掴む問いかけなどをしていく。 ・漢字に関しては、反復練習が必要。漢字小テストやドリルパーク等で反復練習していく。
---	--	---

2 社会科

目指す児童像を基にした社会科での育成したい資質・能力		
社会的な見方・考え方を働かせ、知識や必要な情報を集めたり読み取ったりしたことを生かして、主体的に問題を解決しようとし、学習したことを社会生活の中で活用する態度を養う。		
学年	現在の状況	改善のための取組
中	・教科書や資料に載っているものをただ書き写して満足してしまう児童や、学んだことをただの知識として処理している児童が多い。 ・地図記号や方位など、新しい用語の理解は定着しているが、写真や地図、グラフ、情報を正しく読み取る力に課題がある。 ・資料を整理して、活用する能力に課題がある。	・授業の中で、地図や資料を提示して、読み取る学習の機会を充実させる。 ・何の情報が必要かどうか考え、集め、読み取りまとめていく調べ学習の時間を作る。 ・資料から読み取ったことを発表させたり、交流させたりする場面をつくり、自分の考えをもつことができるようにする。 ・学び得たことを生活の中に返し、実際の社会生活で活用するにはどうすればよいのかを考えられる指導を行う。
高	・5年生は知識・技能、思考・判断・表現が共に区の平均を2.8ポイント下回っている。 ・6年生の平均正答率は、目標値を5ポイント上回っているが、国土の自然環境と国民生活が、区の平均を0.7ポイント下回った。 ・知識を基に、社会事象を身の回りと結び付けて考えたり、活用したりする能力が弱い。	・授業の終わりに、ドリルパークやテストパークを活用して知識の定着を図る。 ・情報と情報を結び付け、関連付ける思考を高めるため、既習事項をつなげたり、複数の資料を提示したりしながら、思考を深める学習をする。 ・学習問題に対する考えを自分の生活と結び付けて記述させる。

3 算数科

目指す児童像を基にした算数科での育成したい資質・能力		
基礎的・基本的な知識・技能の定着を目指し、新たな問いに既習事項を活用し、主体的に解決できる力を育成する。		
学年	現在の状況	改善のための取組
スタート カリキュラム	・1対1で対応しながら、数を数えることはできた。	・何度も反復させることで、数的な感覚を養う。
低	・数の合成や分解は理解している児童が多い。計算問題になると、手を使って解くため、時間がかかる。 ・文章問題を立式することが難しい。 ・数の大きさを適切に捉え、計算をすることが苦手。	・半具体物を用いて、数の構成を捉えられるようにする。児童用計算カードや教師用計算カードを用いて、時間を計りながら反復する。 ・文章のキーワードに着目させたり、問題場面を図で表現させたりしてから解くように指導する。 ・具体物(ブロックや数え棒など)の操作を通して、数の大きさの感覚をつかめるように支援する。 ・学習課題に生活経験を結び付けた指導を日常的に行うようにする。
中	・文章を正確に読み、正しい答え方をする論理的な思考力に課題がある。 ・既習事項(三角形、四角形、単位換算など)が定着していない。 ・式を立てたり、答えを求めることはできるが、根拠を説明することができない。 ・問題を正確に読み取り、理解する力に課題がある。 ・基礎的・基本的な知識・技能が身に付いていない児童が3割程度いる。 ・先行知識をもって学習を完了したと思っている児童が半数程度いる。	・自力解決の時間に、答えを出すだけではなく、考えの根拠を図や計算、文章で説明させるようにする。また、友達の多様な考えに触れさせ、いろいろな考え方を学ばせる機会をもつ。 ・単元に入る際に、既習事項について確認する時間を取り、めあてを確認してから授業に臨めるようにする。 ・問題を提示した際に、児童に問題の求める答えやその答え方について見通しをもたせる時間を設ける。 ・児童の実態に応じて、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る時間を授業中に設定する。 ・学習の到達点を、「知識・技能の習得」から、「既習事項をもとにして筋道を立てて考え、新しい知識・技能を習得する」という考え方にシフトできるように指導する。
高	・思考・判断・表現が区平均より4.5ポイント下回っている。 ・データの活用の領域、記述式の問題の正答率が低い。 ・自分の考えを相手に伝える能力が低い。	・既習事項を確認し、自力解決に向かえるような授業設定をしていく。また、自分の考えを伝える場面を十分にとるようにする。 ・計算の仕方や解答に至るまでの過程を論理的に発表させたり、ノートに記述させたりすることを引き続き行っていく。

	・平均正答率は、目標値を 10 ポイント上回っているが、区の平均と比べると 3 ポイント上回っている。全領域で区平均を上回っている。 ・正答率度数分布では、習熟度の高い層（90%以上）に児童の約半数が含まれている。中位以下の層（60%以下）に児童の約 2 割が含まれている。	・算数が苦手な児童に対しては、習熟度別指導で個に応じた手厚い指導を通じて、自信をもたせるようにしていく。
--	---	---

4 理科

目指す児童像を基にした理科での育成したい資質・能力		
理科の見方や考え方を働かせ、問題を基に見通しをもって観察・実験を行い、問題と結果を結びつけながら仮説や考察を行う力を育成する。また、多様な考えを取り入れながら、粘り強く問題解決に取り組もうとする態度を養う。		
学年	現在の状況	改善のための取組
中	観察・実験に意欲的に取り組む児童が多い一方で、実験そのものを活動として楽しみ、何を明らかにするための実験なのか、その目的を十分に意識できていない児童が見られる。また、予想したことに対する根拠を言葉で説明したり、観察した事象や実験結果を整理し、それらを根拠として自分の考えを形成したりすることにも課題がある。問題、予想、観察・実験、結果、考察、結論という問題解決の過程を関連付けて捉えることが十分でなく、既存の知識のみで事象を判断し、観察・実験の結果を基に考えを深めることができていない児童も見られる。	問題解決の各過程のつながりを意識できるよう、問題、予想、観察・実験、結果、考察、結論という学習の流れと、それぞれの意味を確認する時間を授業の中に設定する。特に観察・実験を行う際には、「何を明らかにするための実験なのか」を児童と共有し、問題に対する見通しをもって取り組めるようにする。また、予想を立てる際には、これまでの生活経験や既習事項、身近な自然事象などを想起させ、自分なりの根拠をもって考えられるようにする。 観察・実験後には、得られた結果を整理するだけで終わらず、「この結果から何が分かるのか」を自分の言葉で説明する時間を十分に確保する。その際、問題や予想に立ち返りながら結果を捉え、結果を根拠として考察し、結論を導き出すという一連の流れを意識させる。さらに、考察場面では自分の考えを他者と交流する場面を設定し、異なる考えや新たな視点を取り入れながら、自分の考えを見直したり、より妥当な考えへと修正したりできるようにする。 実際の自然事象に触れる機会を大切にするとともに、学習によって得た知識を身近な自然事象や生活の中の問題と結び付けて考える場面を設定し、自らの考えを更新しながら粘り強く問題解決に取り組

		おことや、理科で学ぶことの意義を実感できるようにする。
高	既習事項や生活経験を生かし、具体的な根拠をもって仮説を立てたり、観察・実験の結果を基に考察したりすることができる児童が見られる一方で、問題解決への取り組み方には二極化が見られる。特に、既有的知識が豊富であることから「知っていること」を「理解していること」と捉え、目の前の自然事象に疑問をもったり、観察・実験の結果を基に自分の考えを改めて検討したりすることへの主体性が十分でない児童が増えている。そのため、知識を問う問題には正答できても、仮説や考察において自分の考えの根拠を示したり、実験結果と問題を関係付けて考えたりすることに課題が見られ、知識・技能と、思考・判断・表現の力との間に差が生じている。一方で、既有的知識の多少にかかわらず、自然事象に興味をもち、粘り強く問題解決に取り組みながら、自分なりの考えを形成している児童も見られる。	昨年度に引き続き、問題解決の流れを視覚的に捉えられるよう、理科室内のステップチャートや“ヘルプカード”、“理科のノートの作り方”等を活用し、問題、仮説、観察・実験、結果、考察、結論という一連の流れを児童自身が意識できるようにする。その上で今年度は、既有的知識のみで事象を判断するのではなく、「なぜそう考えるのか」「観察・実験の結果から本当にそう言えるのか」と問い返すことを大切に、既習事項や生活経験を根拠として仮説を立て、観察・実験の結果によって自分の考えを検証するという問題解決を重視する。 考察場面では、実験結果を単に文章にまとめるのではなく、問題や仮説に立ち返り、複数の結果を比較したり関係付けたりしながら、根拠を明確にして自分の考えを表現できるようにする。また、自分の仮説や考察を他者と交流する場面を意図的に設定し、多様な考えや異なる根拠に触れることで、自分の考えを見直したり、より妥当な考えへと修正したりする経験を積ませる。 学習によって得た科学的な知識や用語を、考察や説明の中で活用したり、身近な自然事象や生活の中の問題を説明するために用いたりする場面を設定する。知識を「知っている」ことだけで終わらせず、実際の事象を捉えたり問題を解決したりするために活用する経験を重ねることで、主体的かつ粘り強く問題解決に取り組む態度を育てる。

5 生活科

目指す児童像を基にした生活科での育成したい資質・能力		
自分の思いや気付きを大切に、友達と対話を通して身の回りの生活に生かしたり、様々な学習と結び付けながらよりよくしたりしようとする力。		
学年	現在の状況	改善のための取組
スタート カリキュラム	- 基本的な学校生活習慣は身につけ、落ち着いて学校生活を送れている児童が多い。 - トイレや水道の使い方に課題がある。	トイレや水道に実際行って、使い方を確認する。次に使う人の気持ちを考えさせる。
低	植物の成長について、新たな気付き	観察前に前時の観察カードや写真を見て振り返

を見つけて、観察カードに書くことはできる。しかし、前回と比較して観察することに課題がある。 ・学習した内容を他の単元に結びつけて考えることが苦手。	る時間を設け、それが今回どうなっているかという視点や意識をもたせる。 ・これまでの生活経験を振り返る時間を設けて、新たな気づきを生み出せるようにする。
--	--

6 音楽科

目指す児童像を基にした音楽科での育成したい資質・能力		
音楽活動を楽しみながら、「できた！」を積み重ね、主体的・協働的に学習活動に取り組む。 音楽を形づくっている要素を基に、音楽を聴いたり表現したりする活動を通して、音楽への自分の思いをもてるようにする。		
学年	現在の状況	改善のための取組
低	・どの児童も音楽科に対して楽しみながら取り組むことができている。鍵盤ハーモニカの学習が始まり、指使いやタンギングど、技能を要するものに関しては個々に課題が見られる。 ・鍵盤ハーモニカの技能に個人差がある。 ・曲のレパートリーが少ない。知っているても歌える曲が少ない。	・スモールステップでどの児童も達成感をもてるようにする。ミニティーチャーなども活用し、互いに関わりながら学んでいけるようにする。 ・休み時間や帰りの会など、日常生活の中で耳にする機会を増やし、児童から歌いたいという声を引き出すようにする。 ・教師が率先して、リズム打ちや身体表現を入れながら楽しく歌える雰囲気をつくり、繰り返し歌いたくなるようにする。
中	【3年生】 ・姿勢を保持できない児童が多い。 ・指の力、手足の動き、息の強さ、感覚等、を連動させられない児童がいる。 【4年生】 ・強い特性をもったり集団に馴染めなかったりする児童の能力差が大きい。 ・グループでの話し合いや表現活動で、だれとでも協力しながら、自分の考えを伝えたり、友だちにアドバイスしたりできる児童が多くはいない。	【3年生】 ・姿勢について、挨拶、表現活動等、常に声掛け指導し、体が基本であることを植え付ける。正しい姿勢など視覚的にわかる掲示物を貼り、意識させる。 ・常時活動で、呼吸に合わせて、手足、体を動かせるようなものを適宜取り入れていく。 【4年生】 ・授業のはじめに、1時間の活動の流れをステップチャートで示し、各自、授業に臨むための見通しをもつ。 ・様々なグループ活動を取り入れ、どのように取り組むか試行錯誤し成長していけるようにする。 ・そのために、振り返りなどの記録方法を工夫す

		る。
高	【５年生】 ・女子の発信力が、男子に比べると比較的弱い。 ・音楽を形づくっている要素の気付き、そのよさを感じ取り言葉にする力が弱い。 【６年生】 ・学習のふり返りを丁寧に表現し、次への課題を明確にもつ力が弱い。	【５年生】 ・知識・技能面の積み重ねに対し、自信をもたせる言葉掛け、表現の場づくりを意識して取り入れる。 ・板書やワークシート、楽譜づくりなどの活用で、音楽のよさが、特徴や表現、曲想との関係の中にあることを理解できるようにする。 【６年生】 ・ふり返りの時間を確保し、グループやペアで伝え合う活動を取り入れ、その中で次への課題をもてるような対話を促すようにする。

7 図画工作科

目指す児童像を基にした図画工作科での育成したい資質・能力		
表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、つくりだす喜びを味わい、自分の感じたことや思い、考えを深める力を養う。		
学年	現在の状況	改善のための取組
低	・多くの児童が作品作りに対して意欲的である。一方で、発想がもてず、手本を真似する児童もいる。 ・絵や工作をする際のイメージをもつことが苦手。	・発想が広がるように、場の設定を工夫する。鑑賞しやすい席の配置にしたり、鑑賞時間を設けたりする。 ・導入や活動前に見本の画像・作品を紹介し、児童にイメージをもたせられるようにする。また、良いイメージを出来ている児童を取り上げて、紹介する。
中	・多くの児童が作品づくりに意欲的であるが、イメージを表現することが難しい児童がいる。 ・個別の支援を必要とする児童が多く、指示が複雑になると活動が停滞する児童がいる。	・友達や他クラスの作品を掲示したり、鑑賞したりする時間を設ける。机間巡視において、個別の支援を行う。 ・毎時間の活動を明確にし、活動のプロセスを細分化する。用具の使い方や授業の流れをイラストや文字で黒板にまとめ指示を視覚化する。
高	・自分の思いを明確にもち、深めながら作品づくりを進めることが課題である。	・ワークシートを活用し、自分の発想をまとめる時間を設ける。自分の思いや表したいことを作品をつくりながら振り返れるようにする。

8 家庭科

目指す児童像を基にした家庭科での育成したい資質・能力		
自分の生活に関心を持ち、基礎的基本的な知識や技能を身に付け、自分の生活をよりよくするするために主体的に課題を見だし、解決策を探究しようとする子		
学年	現在の状況	改善のための取組

高	生活経験の差も大きく、基礎的・基本的な技能が身につけていない児童が多い。 自分の生活と結び付けて考えられる児童が増えた。	基礎的・基本的な技能の習得をするための時間を確保する。
---	---	-----------------------------

9 体育科

目指す児童像を基にした体育科での育成したい資質・能力		
体育や保健の見方・考え方を働かせ自己の課題を見付けながら、その解決に向けて思考・判断し、活動することで技能の向上を実感すると共に、他と協力しながらよりよいルールや活動の在り方を考え、楽しさや達成感を共有することで、運動に親しみ、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する。		
学年	現在の状況	改善のための取組
低	・体を動かすことに楽しんで取り組んでいる。体幹がないため、新しい回転技など自分の体をコントロールすることへの不安をもつ児童が多い。 ・運動経験に乏しく、体を上手にコントロールできない場面が多い。	・授業の初めに、バランス感覚を養う活動を取り入れ、楽しみながら体幹を育む。 ・走る、跳ぶ、(鉄棒を)回る、転がる、支える、取る、投げるなどの感覚を養えるように、多様な活動を多く取り入れるようにする。
中	・基礎的な体力や体の動かし方が身につけていない。 ・グループ活動の際に、話し合いを通して、グループの記録や行動を高めようとする意欲がない。 ・自分の技能や得意不得意に応じて、練習方法や場を選択し、工夫することが少ない。 ・勝ち負けにこだわりすぎて、運動自体の楽しみを無視し、技能の向上ではなく、相手を負かすだけの活動になってしまう児童がいる。 ・運動を苦手ととらえ、参加ができない児童がいる。	・体づくり・体ほぐしの運動を授業の前に入れて、児童に身につけさせる。 ・運動のめあてをしっかりと確認し、児童一人一人に個人の目標やめあてをもたせたり、グループのめあてをもたせる。 ・練習方法や場について、具体的に説明し児童それぞれがどれを選べばよいか確認しながら進めていく。 ・勝ち負けを意欲につなげることは肯定しつつ、勝つために必要な技能や、他との協力に目を向け、運動に励むような指導を行う。 ・声のかけ方集などを作り、思いやりをもって声をかける環境を整えつつ、互いにアドバイスをしあいながら、自身の技能が向上する達成感、体を動かすことの楽しさに触れられるよう指導する。

高	・運動技能の差が大きい。 ・意欲的に運動に取り組める子が少ない。 ・登り棒や雲梯などの基本的な筋力、技能に課題をもつ。 ・友達と協働しながら学習を進められる場面が見られた。振り返りの内容を充実させていくことが課題である。	・多様な運動の場を設定して、達成感を得られる活動を継続して行う。 ・全員が参加できるルール作りからはじめ、運動を楽しみながら技能向上を目指す。 ・準備運動の充実、体づくりの運動で体の操作の力を高めていく。 ・校内研究と絡め、振り返りの時間の確保や方法を工夫していく。
---	---	--

10 英語活動・外国語活動・外国語科

目指す児童像を基にした外国語科等での育成したい資質・能力		
言語活動や各ユニットのゴールを意識し、新出語句やキーセンテンスを用いながら対話する力。活動を振り返りながら、次への意欲や見通しをもつ力		
学年	現在の状況	改善のための取組
低	・ALT とのコミュニケーションを楽しみながら取り組んでいる。その時間に学習した単語を使いながら、学習をすることができているが、時間がたつと忘れてしまう児童も多い。 ・意欲的に取り組んでいるが、表現することに躊躇する児童も見られる。	・学習した単語やキーセンテンスを思い出せるように、授業のはじめに、簡単な復習をする。 ・ALT や担任が率先して見本を示したり、児童の良い表現を称賛したりする。
中	・活動を楽しんでいるが、キーセンテンスの習得や活用が十分ではない。 ・基本的なアルファベットの書き方が理解できていない児童が複数人いる。 ・コミュニケーションをとる以前に、言葉の意味や、表現の仕方が分かっていない児童が半数程度いる。	・前時のキーセンテンスを授業の始めに復習する時間を設け、定着を図る。 ・ALT の先生がいないときには書き方を練習するなどして、基礎の定着を図る。 ・それぞれの単語や文章の意味、発音、活用を確認・練習し、自信をもってコミュニケーションを図れるようにする。
高	・習熟の差が大きい。 ・キーセンテンスやレスポンスを意識して、アクティビティを意欲的に行う姿が増えたがそうではない児童もいる。 ・毎時の振り返りカードが次時の意欲につながっている。	・全員が楽しく参加できる言語活動を工夫して、表現したくなる場を設定する。 ・一人一台端末を活用するなど、自分の考えを表現できる場を設定する。 ・引き続きキーセンテンスやレスポンスを意識したアクティビティを設定し、知識、経験を積み上げていく。

Ⅰ 特別の教科 道徳

目指す児童像を基にした道徳科での育成したい資質・能力		
よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。		
学年	現在の状況	改善のための取組
低	・場面や登場人物の心情を考えて、交流や発表することに意欲的である。自分と結びつけて考えることが難しい児童もいる。 ・扱う題材について、自分事として考えられる児童が少ない。	・教師自身の経験を聞いたり、自己を見つめる時間を設け、具体的な場面を想定したりすることで、自分と結びつけて考え、これからの生活に生かせるようにする。 ・ロールプレイなどでモデルを示し、「自分だったら・・・」と自分事として考えられるように促す。
中	・登場人物の気持ちを理解することはできるが、そこから似たような場面を振り返り、内省したり自分事にする力が弱い。 ・表面的な意見に終始してしまい、道徳的な価値のある行動を行うことの難しさに気づけていない。 ・多面的・多角的に捉えることが苦手な児童が多い。 ・自己の生活に振り返ることまで結びついていない。	・自己をみつめる発問を充実させる。(自分の生活や経験を振り返る。それを省みて、善悪や是非を問う) ・発表する意見が表面的(一般論)にならないように、登場人物の境遇や背景について深く理解させたうえで自分の意見を考えさせる。 ・様々な立場の登場人物の気持ちを考えたり、ペアやグループ活動を通して自分と違う考えに触れたりする。 ・自分の経験と結び付け、振り返る観点を教師が示す。
高	・児童が自分の考えを積極的に述べることがない。 ・教材によって自分ごととして捉えることが難しい。 ・友達の意見を聞き、自分の考えを深めることができた。一方で、道徳的な実践につなげられていない児童が多い。	・意図的指名やペアとの対話を取り入れ、自分の意見を発表する機会を設ける。 ・教材研究を行い、中心発問や教材掲示を工夫する。 ・教育活動全般を通して、道徳的な価値付けを行っていく。

Ⅰ 2 総合的な学習の時間

目指す児童像を基にした総合的な学習の時間での育成したい資質・能力		
実社会や実生活の中から課題を見だし、情報収集を選択しながら、追求する力。 自らの考えや課題を更新し、探求の過程を繰り返しながら問題解決する力。		
学年	現在の状況	改善のための取組
中	・発表資料を作る際に、情報を集めることはできるが、それを理解し、処理して表現することに課題がある。	・国語科の発表についての単元などを活用し、書く・話すの能力を高めていく。 ・発表資料を作る際に、資料の丸写しではなく、

	・自分で課題を見つけることができない児童がいる。 ・課題解決までの流れを理解していない。 ・多くの情報から必要な情報を取捨選択する力が弱い。 ・教師側からの提示により、活動を開始している段階である。 ・先を見通した計画的な学習を進めることができていない。	わかったことを自分の言葉でまとめるように助言する。 ・課題をより具体的にして、必要な情報を取捨選択し、整理しやすいようにする。 ・苦手な児童には助言・支援するようにする。 ・児童に課題意識をもたせ、解決に向けた方法や見通しをもてるように指導し、計画的に学習を進められるようにする。
高	・調べたことを相手意識をもって表現する力が身につけていない。 ・主体的に課題解決におかえる力が弱い。 ・移動教室に向けた調べ学習を行い、情報を選択しながら追究した。課題の更新、探究過程の繰り返しを今後の活動とする。	・互いの発表や表現物を見合い、良いところを取り入れさせる。 ・身の回りの事象から主体的に課題に値するものを見付けさせる。 ・SDGsについての調べ学習や、実践を通して課題の更新を図っていく。

1.3 特別活動

目指す児童像を基にした特別活動での育成したい資質・能力		
集団や社会の形成者としての見方や考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、集団活動の意義を理解したり行動の仕方を身に付けたりして、自己の生き方について考えを深め自己実現を図ろうとする態度を育てる。		
学年	現在の状況	改善のための取組
低	・集団生活に慣れ、日直や給食当番、掃除当番、当番活動などに進んで取り組む様子が多く見られる。 ・学級集団の一員としての意識がもてていない児童がいる。	・学級がよりよくなるために、どのような係があったらいいかを自分たちで考え、係活動を行う。 ・学級がよくなるためにどうしたらいいか、話し合う学級会の時間を積み重ねる。 ・集団を高められるような発言や行動を促すようにする。
中	・話し合い活動の意見をまとめるまでの話し合いの流れを理解していない。 ・話し合いを通して意見を決定することができない。多数決になってしまうことがある。 ・集団活動を楽しむことはできているが、自主的でなく、与えられた中で活動	・視覚的にわかるように流れを提示する。話し合いの機会を多く設ける。 ・話し合いのめあてや目的を常に意識させるとともに、友達意見の良いところに着目させる。 ・当事者意識をもち、自主的に活動することができるよう、様々な役割分担をしながら活動を進めていく。

	している児童が多くみられる。 ・活動はあるが、その目的や運営方法を理解し、考えていない姿も多々見られる。	・活動は目的を達成するためのものであることを常に指導し、なんのための活動かを意識した行動ができるようにする。
高	・委員会活動においては当番活動や仕事に積極的に取り組んでいる。 ・学級会の経験が少ない。 ・子どもまつりなどの行事に向けて、児童が主体的に話し合い、課題解決していく姿が見られた。 ・委員会活動やたてわり班活動で、各自の役割を果たそうとする姿が見られた。	・児童の議題から、学級会を設定していく。学級会を児童だけで行う自治能力を高める。 ・児童が必然性をもつ議題を設定しながら、合意形成に向けた学級会を進めていく。 ・見通しをもって、計画的に活動できるようにスケジュールを可視化する。

Ⅰ 4 交流及び共同学習の進捗状況

学年	現在の状況	改善のための取組
低	・副籍交流の計画を立てた。 ・あゆみ学級とリトミックで交流会できた。 ・図工や遠足、リトミック、まちたんけん、おもちゃランド、食育活動、生活などを通して、交流したが関わり合いが少ない。	・遠足など児童の実態に合わせて、交流をできるようにしていく。 ・交流場面を通し、相手の立場を理解し、関われるように支援する。
中	・交流給食が一学期で終わってしまった。 ・あゆみ学級の児童が一人、理科の授業で一緒に学習している。 ・あゆみ学級の児童と、校外学習などの特別授業には一緒に参加しているが、場の共有に留まっている。交流はできていない。	・2学期以降で共同学習につながるような交流活動を計画していく。 ・児童の実態に応じて、レベルや規模を考えて交流する機会を設定する。
高	・着衣泳、スエーデン刺繍、ぎょしょく授業を共同で行った。 ・あゆみ学級との交流（モーニングラン）、1年生のお世話など、6年生としての意識をもって活動行うことができた。	・富士五湖移動教室では係活動から参加して共同的に取り組んでいく。 ・自分たちから相手や周りのためにできるようなことを考えられるように、企画・立案する時間を確保する。